

平成21年 5月19日現在

研究種目： 基盤研究 (B)  
 研究期間： 2006～2008  
 課題番号： 18320140  
 研究課題名 (和文) 水界と森界の変容と創造に関する比較環境人類学的研究

研究課題名 (英文) An Environmental Anthropological Study on Creation and Transfiguration of the Water/Forest-related Life-worlds in a Small Community

研究代表者

松田 素二 (Matsuda Motoji)  
 京都大学大学院文学研究科・教授  
 研究者番号：50173852

研究成果の概要：森林や河川に対して、地元の人々が対処してきた保全と改変の制度と思想、その変容過程を明らかにすることによって、開発と保護という二分法的態度に回収されない独自の環境改変の論理の萌芽を当事者の生活世界にみる。単純な近代化・グローバル化批判でもなく、「伝統的」システムの賛美でもない、新たな知の実践の創造過程に焦点をあて、現代世界の環境認識の理論に新たな視点を提供するとともに、環境政策に対する人類学的研究の貢献の可能性を示した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
18年度	5,700,000	1,710,000	7,410,000
19年度	5,000,000	1,500,000	6,500,000
20年度	5,105,281	1,530,000	6,635,281
年度			
年度			
総計	15,805,281	4,740,000	20,545,281

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学・民俗学

キーワード：ローカルな知識，生活実践，環境思想，水界，森界，環境保全，開発，地域住民組織

#### 1. 研究開始当初の背景

人類史をふりかえれば、人間が自然に働きかけ環境を改変していく過程が確認できる。それはたとえば、チャイルドなどの文明論の議論においては、人類の進歩の指標として取り扱われてきた。しかし1960年代には、レイチェル・カーソンのように、こうした働きかけを否定的にとらえる視点が誕生し支持されるようになった。自然改変の行き過ぎは「公害」問題として、認識され批判されるようになったのである。行政・企業を加害者と

し、住民を被害者とする二項対立的な問題認識に対して、1980年代からは、加害・被害が相互に重複する重層的な問題認識が登場してきた。その象徴的な例が、温暖化や気候変動などの地球環境問題だろう。またこれまで被害者として表象されてきた住民が、自動車の排気ガスや合成洗剤の使用によって、環境を劣化させる側に立っていることも、こうした問題認識によって明らかにされてきた。我が国においても、水俣を代表とする「公害問題」研究、琵琶湖の合成洗剤規制のような

「環境保護運動」研究など、環境問題について社会・文化・歴史的分析が蓄積されてきた。こうした環境問題認識のパラダイムシフトにともない、1990年代以降、日本の人類学においても、環境問題を正面からとりあげる研究が登場しはじめる。しかしその多くは、フィールドにおける環境破壊を地域社会への危機として把握し、グローバルな生態環境保護の立場にたって展開するものだった。本研究は、このような環境保護の生態学的パラダイムに異議をとなえ、そこで地域生活を営む人々の日常の必要を第一義とする生活パラダイムを主張して、森と水と人の生活の関係を基軸に、それらがつくりだす錯綜した環境保全への態度と実践を明らかにする研究となる。ときには乱開発、環境破壊の当事者となる人々の実践を、単純に避難したり弁護したりするのではない、当事者の生活世界と向き合うのである。こうした研究は、現代世界の環境認識の理論に新たな視点を提供し、環境理論と社会的実践を環境政策の媒介にして考察する点で、ユニークな研究領域を開拓するものだと考えられた。

## 2. 研究の目的

行き過ぎたグローバル化（あるいは世界標準化）に対抗するために、まず試みられた実験は、ローカルな地域社会が固有に発展させてきた制度や規範を再評価することであった。環境問題の知的現場においても、1980年代前半に生活環境主義を提唱して以来、こうした立場に依拠した研究が少なからぬ成果を生み出してきた。しかしながら、こうしたローカル（コミュニティ）の価値再評価は、往々にして、伝統・文化・共同体を固定的で不変に持続する実体として定位してしまう傾向を生み出していった。そして、グローバル／ローカルの二項対立図式のなかで、一方を肯定し他方を否定非難する、平板で単純な構造が作り出された。

本研究では、こうした平板な図式を乗り越え、これまで静態的にとらえられてきたローカルな知識や実践が、いかに近代化の過程で変容し、再創造されてきたかという視点に立脚して、さまざまな地域の経験を整理し、そこから新たな環境思想と実践の可能性を探ることを目的としている。各地域の固有な歴史、社会、文化的要素は、外部の強力な力と折衝、交渉、妥協、接合することによって、ローカルな知識や実践を創発的に更新しつづけている。この過程を、本研究においては、水界と森界という二つの領域の生成と変容に焦点をあてて考察する。ここでいう水界とは、河川、湖沼、井戸、天水、水溝といった水にかかわる空間に人びとの生活する世界が交じり合い創出される場のことを指し、森界とは、森林、里山、木材という世界と同じ

く人びとの生活世界と接触することで生成される場を意味している。自然環境を基準にすると異なるカテゴリーに分類される、こうした諸要素は、人間の生活との関わりという基準においては、同一の世界に帰属する。この生活との関わり方は、各地域の文化社会的コンテクストごとに相違しながらも、共通の構えをもっている。本研究に参加する研究者は、これまで長いフィールド調査経験によって、この共通の構えを対象化しており、共同比較研究によって、その全体像を解明するとともに、地域共同体の環境保全論理が、外部条件と接合しながら構成される歴史的編成過程を解明し、比較研究のための理論モデルの構築をはかる。

## 3. 研究の方法

日常の生活世界のもつ可能性を、どのようにして、それぞれの地域社会の固有性を越えた文脈で理論化するために、本研究においては、比較環境史研究会を組織して、こうした日常生活の論理を基軸にすえたフィールド研究者が集い、相互の知見の比較と交換、突き合わせをする作業を続けてきた。その中心メンバーは、1980年代初頭に琵琶湖畔の一集落を拠点に、水と人の関係を基軸にした環境研究を、人類学、社会学、民俗学、地理学、農村経済学などの研究者と共同で行い、生活環境主義という考え方を立ち上げたときの調査メンバーであった。本研究においては、こうしたメンバーに加えて、国家やそれを包摂する世界システムと、地域の人々の生活が、ときに激しく衝突したり、競合・協調したりする環境問題の現場をフィールドにしてきた研究者を交えて、共同研究を行った。

また各研究者は役割分担にしたがって調査地を、日本と海外に設定し、当該地域の住民が、生活空間としている森林（森界）や河川・湖（水界）に対していかなる認識をもち、どのような実践規則を形成してきたかについて、集約的な現地調査を実施した

## 4. 研究成果

本研究においては、生活環境主義にもとづく丹念な国際比較研究を通じて、地元の人々が、近代化・グローバル化の過程で破壊されつつある自然環境に対して、開発と保護という二分法的態度に回収されない独自の環境改変の論理の萌芽を生み出してきた明らかにした。それは、単純な近代化・グローバル化批判でもなく、「伝統的」システムの賛美でもない、新たな知の実践の創造過程に焦点をあてながら、このいわば生活の論理を抽出し、現代社会の文脈のなかで、環境政策的に再構成するための知見を獲得した。また、国際比較研究をおこなうにあたって、通文化比較のための方法論の構築にあたった。

(1) 生活環境主義にもとづく国際比較研究  
 環境保全・改変を主導する生活の論理そのものが、地域社会が経験する近代化・グローバル化のなかで変容していく過程の解明まで射程に入れることでアジア・アフリカの地域社会のなかで、生活の論理によって環境保全と改変が主導的に行われていく過程を鮮明に描き出すとともに、森界・水界についての認識や規範の類似と差異を分析して、地域の生活環境構造を明らかにした。  
 なお、下表は、各研究者の事例調査地とその調査内容についてまとめたものである。

	事例研究地	主な調査実施内容
松田	①ケニア マラゴリ・フォーレスト周辺地域	<森界> 政府の一方的森林管理に異議を唱えた森の民と政府・NGO との葛藤と森林問題に対する地域社会の対処方法の把握と課題の整理
	カカメガ・フォーレスト周辺地域	<森界> ケニア最大の森林地域における住民への聞き取り調査
	②三重県 熊野地方	<森界><水界> ・高齢化で管理不全となった森林保全のための実践と水と森の管理制度の変遷と現状の整理
鳥越	①中国 北京郊外の農村地域	<水界> ・水と景観の管理を中心にした都市住民の環境管理における規範と実態の把握
	②東京旧市街および郊外ニュータウン	・水管理と住民組織の関係に焦点をあてた比較分明的考察
古川	①ネパール カトマンズ盆地	<水界> 急速に都市化が進行する地域での水環境の変化と現状の課題を整理
	ソル・クンブ地方	<森界> 環境破壊が進行する森林地域での集落による水と森林を中心とした環境利用の組織化に関する調査
	②愛知県 矢作川流域	<水界> 環境利用の変遷と政策とのかかわりをめぐる考察

中村	①ネパール カトマンズ市、ラリットプル市	・住民および高齢者施設における高齢者ケアの実態把握と比較
	②三重県 熊野地方 (山村小集落)	<森界><水界> 日本の中山間地域の集落における山と川の保全に関する実態を明らかにする
川田	①フィリピン マニラ都市圏	<水界> 生活廃棄物が投棄される小河川の住民調査
	②愛知県 足助地方	<森界><水界> 観光と環境という視点からの地域おこしの課題を考察
伊地知	①韓国 済州島	<森界> 大規模開発(森林破壊)に対する山村共同体の反応
	②三重県 伊勢志摩地方	<水界> 済州島からの出稼ぎ韓国人海女を対象にした漁法や資源管理の実態と課題の整理

### (2) 通文化比較のための方法論の構築

これまで、日常性の社会理論は、ともすれば日常性とそれを育む伝統をアプリオリに指定し、ときに無条件に評価する「伝統回帰主義」的志向に回収されがちであった。しかし、近代主義・グローバリゼーション批判のブレークスルーとして、ローカルな伝統を再評価する思考もまた、じつは平板な近代主義モデルの産物であり、ローカルな伝統として一括されるものもつ多様で不均質な揺れを十分にとらえられてはいない。

そこで本研究においては、こうした日常の生活世界のもつ可能性を、どのようにして、それぞれの地域社会の固有性を超えた文脈で、あるやや抽象度の高い環境保全生成の論理を導きだすことを試みた。そのため、個別の調査地で集積された資料を同じレベルで比較検討する方法論が必要であり、同時に資料共有化のためにある程度の資料のデータベース化と共同研究会での討議に力を注いだ。なお、データベースについては、研究分担者である古川が琵琶湖資料のデータベースを作成しつつあり、その方法を援用した。

### (3) 環境政策に対する人類学的研究の貢献

世界各地のフィールドからの思考をつねに、日本の地域社会の経験にフィードバック

して整理統合することを試みることによって、森林や河川に対して、地元の人々が対処してきた保全と改変の制度と思想、そしてその変容過程を明らかにすることが可能となる。そして、それらを比較し核となる環境論理を抽出することを通して、たんに土着のシステムの再評価にとどまらず、新たな環境知の発見と環境政策の創造へとつながる視点を展望した。くわえて、日本のフィールド経験をもとにした比較研究を活用することによって、相互の経験のフィードバックから、集積された資料から住民と政策とのかかわりを実践的な目で検討するとともに環境政策に対する貢献の可能性を追求した。

さまざまな領域において、20世紀の社会と明確に一線を画することとなった21世紀の現代世界は、たしかに東西イデオロギー対立の消滅は、自由と民主主義を世界基準として確定させたし、資本、商品、情報、ヒトは国民国家の領域を超えて巨大な流動状況を創出している。しかしその一方で、こうしたグローバル化の時代の負の側面として、人種・民族・宗教間の対立抗争や貧困、人権侵害とならんで急激な環境破壊は、世界各地から報告されている。では、このような負の側面を、私たちはいかにして乗り越えることができるだろうか。また現代人類学は、この営みのなかでどのような役割を果たすことができるだろうか。本研究では、この点について「環境問題」を切り口にして、人類学的な叡智と実践をもとに回答を試みた。

#### (4) 研究成果を踏まえた今後の展望

本研究の成果をふまえ、今後も、琵琶湖、熊野、志摩、矢作川といった日本のフィールドと、東アフリカ（ケニア）、南アジア（ネパール）、東アジア（中国・韓国）東南アジア（フィリピン）という海外フィールドワークを、精力的に継続するとともに、日常生活世界のもつ可能性を、それぞれの地域社会の固有性を越えた文脈において理論化する取り組みを推し進めていきたい。

なお、本研究においては、こうした研究成果を地元実践的に還元する回路を用意することを重点の一つにおいてきた。しかし、これまでの調査で得た知見と地域改善のための提言を準備し、地元共同体と意見交流の場を設定するにあたって、いくつかの課題が残されたことも事実である。これらの課題については、今後、それぞれの研究活動の中で、取り組むべきこととしたい。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計13件）

① Motoji MATSUDA, Reconciliation and Redress in Post-colonial East Asia: Creativity of Narrative of Suffering, *New Currents in Asian Studies in/Between National Boundaries*, Kyujanggak Institute for Korean Studies, Seoul National University: 60-85, 2006.

② 川田牧人, 「踊る路上の聖人 ストリートから広がるフィリピンの聖像崇拜の生活風景」『季刊民族学』117: 76-91, 2006.

③ 川田牧人, 「伝承知識とノスタルジーー「よりよい暮らし」の語りロー」『中京大学社会学部紀要』21-1: 65-85, 2006.

④ Makito KAWADA, Book Review: Carolyn Brewer, *Shamanism, Catholicism and Gender Relations in Colonial Philippines*, *Asian Folklore Studies*, Vol LXV-1: 116-118, 2006.

⑤ 伊地知紀子, 「解放直後・在日済州島出身者の生活史調査」『日本 オーラル・ヒストリー研究』第2号: 40-51, 2006.

⑥ 伊地知紀子, 「韓国の海域生活者による漁撈文化の形成と変容—済州島チャムスの移動と生活文化から」『国際比較研究』3: 111-117, 2006.

⑦ 古川彰, 「定住者の知と交流の論理—愛知県矢作川の事例から」『東北社会学年報』36: 7-30, 2007, 査読無し.

⑧ Hiroyuke TORIGOE, Potential of Partnership Development in a Lake District, *Asian Rural Sociology* Vo3:92-108, 2008, 査読無し.

⑨ 中村律子, 「戦前の養老院の社会的意義について—開園から救護法施行期までの浴風園の原史料分析—」『現代福祉研究』8: 229-250, 2008, 査読無し.

⑩ 松田素二, 「グローバル化時代における共同体の再想像について」『哲学研究』: 1-35, 2008, 査読有り.

⑪ 松田素二, 「互助社会論—ユイ、モヤイ、テツダイの民俗社会学」『社会学評論』Apr-59: 821-822, 2009, 査読なし.

⑫ 松田素二, 「希望の大陸のゆくえ」『地域研究』9巻1号（座談会）: 22-45, 2009, 査読なし.

⑬ 川田牧人, 「セブ市グアダルルーペの聖母信仰をめぐる驚異の共同体」『グローバル時代におけるフィリピン社会—共同性と複数性—』（鹿児島大学法文学部）39-61, 2008, 査読なし.

〔学会発表〕(計5件)

- ①伊地知紀子, 「海域生活世界から見る日常実践の可能性」, 『愛媛大学 法文学部多文化社会研究会 第13回公開シンポジウム』, 2007年7月7日, 愛媛大学.
- ②松田素二, 「グローバル化時代における地域研究の意味」, シンポジウム『グローバル化とローカルノレッジ』, 2007年9月4日, 北京師範大学.
- ③中村律子, 「戦前の養老院における処遇(ケアの特質)ー開園から「救護法」期までの浴風園の史資料分析ー」, 日本社会福祉学会第55回大会, 2007年9月22日, 大阪市立大学.
- ④伊地知紀子, 「日本にいる済州島チャムスー19世紀末から現在まで、移動史をめぐる断片的資料からー」 『国際セミナー 在日済州人の過去と現在』 (主催: 済州大学校耽羅文化研究所), 2008年9月日, 済州大学校国際交流会館.
- ⑤Motoji MATSUDA, Beyond the Africa-Schema, Japan-Africa Journalist Conference, 2009年3月3日, Yaounde, Cameroon.

〔図書〕(計12件)

- ①松田素二, 『米山俊直の仕事 人、ひとにあう むらの未来と世界の未来』(全1008頁), 2006, 人文書館.
- ②松田素二, 「グローバル化時代の人文学ーアフリカからの挑戦」紀平英作編『グローバル化時代の人文学対話と寛容の知を求めて』(全478頁), 2007, 京大出版会.
- ③Akira FURUKAWA, Frontiers of Social Research (全351頁), 2007, Trans Pacific Press.
- ④松田素二, 「セルフの人類学に向けてー偏在する個人性の可能性」田中雅一・松田素二編『ミクロ人類学の実践』(全476頁):308-405, 2006, 世界思想社.
- ⑤鳥越皓之, 「学問の実践と神の土地」新崎盛暉他編『地域の自立シマの力(下)』(全416頁):276-294, 2006, コモンズ.
- ⑥松田素二, 「複雑化する間身体ー現代ケニアのムンギニ・セクトを事例にー」菅原和孝編『身体資源の人類学』(全362頁), 2007, 弘文堂.
- ⑦伊地知紀子, 「韓国・済州島チェムスの移動と生活文化ー生活実践のダイナミズム」中村則広・栗田英幸編『国際比較研究叢書1 等身大のグローバリゼーション』(全288頁), 2007, 明石書店.
- ⑧松田素二, 『文化人類学』(全219頁), 2008, 放送大学教育振興会.
- ⑨古川彰・山泰幸・川田牧人編, 『環境民俗

学ー新しいフィールド学へ』(全321頁), 2008, 昭和堂.

- ⑩松田素二, 「平和のフェティシズム考ー文化的フェティシズムを超えて」田中雅一編『フェティシズム論の系譜と展望』(全350頁):241-269, 2009, 京都大学出版会.
- ⑪川田牧人, 「複数性と選択性ーフィリピン・セブ市のグアダルーペの聖母信仰に関する予備的考察」宮沢千尋編『社会変動と宗教の〈再選択〉ーポスト・コロニアル期の人類学研究(南山大学人類学研究所叢書8)』:61-90, 2009, 風響社.
- ⑫Akira FURUKAWA, Jaraun Hiti: traditional Water Use in Napal (in press), 2009, Vajra Book, in Kathmandu, Nepal.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

松田 素二 (Matsuda Motoji)  
京都大学大学院文学研究科・教授  
研究者番号: 50173852

### (2) 研究分担者

古川 彰 (Furukawa Akira)  
関西学院大学社会学部・教授  
研究者番号: 90199422

### (3) 連携研究者

鳥越 皓之 (Torigoe Hiroyuki)  
早稲田大学人間科学学術院・教授  
研究者番号: 80097873  
中村 律子 (Nakamura Ritsuko)  
法政大学現代福祉学部・教授  
研究者番号: 00172461  
川田 牧人 (Kawata Makito)  
中京大学現代社会学部・教授  
研究者番号: 30260110  
伊地知 紀子 (Ijichi Noriko)  
愛媛大学法文学部・准教授  
研究者番号: 40332829